

チャペルでの奨励（三）一心の平安、勇気、知恵¹

[教訓]

心の底から主を信頼せよ、
自分の知力には頼るな。
どんなことをする場合でも常に主が共にいることを意識せよ。
そうすれば
主はあなたの行く道をまっすぐにしてくださる。

（『旧約聖書』「箴言」 3章5～6節、岡部改訳）

今日この昼休みのひととき、皆さんと一緒に人間の生き方について考える時が与えられたことに深く感謝いたします。

今週のテーマは「卒業生へのメッセージ」ですので、本日は私が皆さんとほぼ同じ年齢であった大学生時代（五〇年近くも前）に始めて知り、そして圧倒された一つのことばを皆さんに紹介し、そしてそれを贈りたいと思います。そのことばは私が当時所有していた金属製のあるメダルに英語で書かれていたものですが、私とそのメダルをどういう経緯で入手したかは今では何も記憶に残っていません。そこに書かれていたことばと図柄（16世紀ドイツの画家デューラーによるよく知られた「祈る手」）だけが鮮烈な記憶として残り、その後現在にいたるまで折に触れて思い出し、生きる上で大きな指針となっています（岡部 二〇〇二）。それはこのようなことばです。

God, grant me the Serenity
to accept the things I cannot change,
the Courage to change the things I can,
and, the Wisdom to know the difference.

日本語に置き換えれば次のようになります。

神よ、私にお与えください

¹ 本稿は、著者が明治学院大学 横浜キャンパス・チャペルでの「チャペルアワー」（2011年1月17日）において述べた奨励の言葉です。

変えることができないものは、それを受け入れる平静な心を
変えることができるものは、変える勇気を
そしてこれら二つを見分ける知恵を

この成句は、米国の神学者レインホルド・ニーバー（一八九二—一九七一）によって書かれた祈りの言葉（Serenity Prayer）として米国で広く知られるものであります。それが一九四三年に、つまり第二次世界大戦中に（そしてたまたまその年は私の生年でもあります）に米国東部マサチューセッツ州における教会の祈りに際して書かれたこと、そしてその作者がどういう人であったかなど（シフトン 二〇〇三）を私が知ったのは、大学卒業後かなりの年月を経てからのことです。これは祈りのことばであるだけでなく、人の生き方について深い洞察と真理を躍動的に述べた見事な詩（ポエム）あるいは芸術作品であるといえないでしょうか。このフレーズに述べられたことは、私にとって何歳になっても、そしてどんな時でも心を落ち着かせてくれ、励ましてくれるものとなっています。

変えることができないものはそれを受け入れる平静な心を

私たちが満足できない事態に直面した時、苛立つとともに怒りがこみ上げてきます。そして他人を責めなくなったり、周囲に当たり散らしたりしたくなったりします。自分ではそのような事態を変えることができないにもかかわらず、私たちの気持ちはなかなか収まらないことがよくあるものです。そのような場合「事態を自分で変えることはできないという現実をまず受け入れなさい。そうすれば心が落ち着くのです」というのがこの祈りの第一の教えです。

事態を変えようとするのではなく、変えられないことを素直に容認しなさい、というわけです。それは、ある意味ではあきらめかもしれませんし、敗北主義とってよいかもしれませんが、しかし、そうすれば苛立った心が静まり、Serenityつまり心の平安（静かな心、平静さ）がもたらされることを教えてくれているのです。変えられないと思われることについて意識的にそうした考えをすれば、それまでかたくなに考えていたことから解放され、ずいぶん気楽になることを示唆しているわけです。

私自身、こうした経験を数多くしています。かつて、ある大きな組織の中で長年働いた経験がありますが、ある日突然、まったく予想外の仕事と厳しい処遇を上司から言い渡されたことがありました。数日間はそのショックで気が動転し、大きな失望と憤りを禁じ得ませんでした。しかし、よく考えてみれば上司による私へのその申し渡しは、私が変えようとしても変えられることではないことに気づいたのです。それはそれとして受け入れ、その上で自分の対応を変えてゆくことにしました。そうすると肩の荷が下りた気持ちになったのです。

変えることができるものは変える勇気を

このように、変えることができないものはそれを受け入れる——これが心の平安にとって第一の要諦です。ところで、何でもそのように受け入れてしまうことが望ましいのでしょうか、そして許されるべきことなのでしょうか。

この疑問に対する答えがまさに祈りの第二の文章です。すなわち「変えることができるものは、変える勇気を（与えてください）」と祈ることを教えています。変えることができるものは変えなさい、変えてゆくべきである、とっています。変えることができるにもかかわらず、変えないのは正しい選択でない、とされているわけです。そして変える場合には勇気をもって変えて行きなさい、と諭しており、その場合に必要な勇気こそを与えてください、という祈りになっています。

この文章は、ものごとに挑戦する勇気を与えてくれます。私の場合、変えるべきものに直面するといつもこの文章を思い出します。人生を通してそうした場面に数限りなく遭遇していますが、最近では私が横浜キャンパスにおける大学院の責任者（国際学研究科委員長）の任務に就いているので、その責務を果たす上でこの文章は大きな勇気を与えてくれています。

本学（明治学院大学）の国際学部は日本で最初にその名称を持つ学部として創設され、その上に置かれている大学院の国際学研究科という名称も日本では最も古いものです。しかしその後は多くの大学で国際学部や国際学に関する大学院が相次いで設立されました。このため、学生獲得の面はもとより、教育や研究の面での競争も激化しています。こうした厳しい現実に直面している当キャンパスとしては、まず学部レベルにおいては、来年四月から国際学部に国際キャリア学科を新設することになっているのは皆さんご存知かと思います。そして大学院においても、研究と教育を一体化する新しいシステムに切り替えるべく検討を進めてきています。そうした変革を推進するうえで必要な勇気が私に与えられるよういつも祈りつつ仕事をしているわけです。

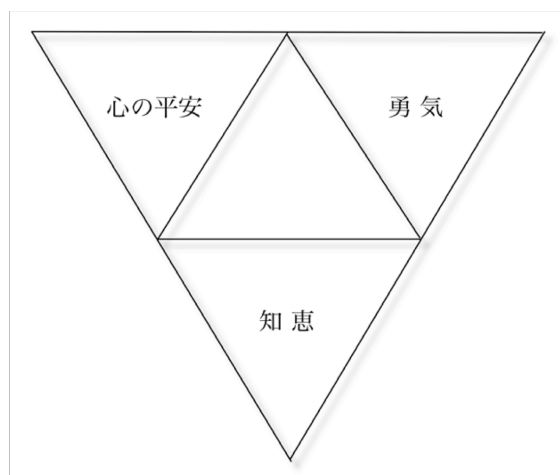


図 ニーバーの祈り（Serenity Prayer）の構造図示

（注）筆者作成。

これら二つを見分ける知恵を

以上では、変えられないもの、変えられるもの、この二つについてそれぞれ述べましたが、ここで自然に出てくる疑問があります。それは、果たしてその二つはどう見分けることができるのか、どう識別できるのか、という点です。

この疑問に対する答えがまさに最後第三の祈りに他なりません。すなわち「これら二つ（変えることができないもの、変えることができるもの）を見分ける知恵を（与えてください）」と祈ることを教えてくれています（図を参照）。ここで登場する知恵（wisdom）とは、道理をわきまえてものごとを正しく認識し判断する能力のことです。それは単なる知識（knowledge）でなくそれを越える、より高い次元に属するものです。

そうした知恵は、色々な人生経験を積むことによって得られる面が少なくありません。私の場合、大学卒業直後から二〇年あまりの期間は前述したとおりの大きな組織で働き、その後現在までの約二〇年間は大学における教育と研究に従事してきました。そして大学で教壇に立つという経験は、幸いにも米国、オーストラリア、そして日本国内と（明治学院大学を含め）合計五つの大学で変化に富む機会を得て現在に至っています。このような多様な経験をする機会が与えられたことは、本当にありがたいことだったと常々感謝しています。そのお蔭により、自分は若い時代よりも良い判断ができるようになったということを実感する機会が多いのは確かです。経験によって身に付いた知恵は少なくないと感じています。

しかし、それと同時に、そこには限界があることも頻繁に感じていることを付け加えなければなりません。つまり、経験による知恵だけでは判断できないような事態、あるいは自分が下す判断が良い判断である、正しい判断である、絶対に間違いのない判断であると自信を持っていうことができない場合も少なくないのです。これは当然のことです。自分は絶対に正しい判断ができる、あるいは究極の知恵を持っていると考えることはとてもできません。もしそう考えるならば、それは傲慢というものです。人間の下す判断や行動の正しさには大きな限界があると考え謙虚さが必要だと思えます。

私の場合、もの心がついてから六〇年以上生きてきてようやく授かった気づき、あるいは知恵が幾つかあります。その一つは、色々な事態に直面したとき、自分にわき上がる感情、どうすべきかの判断、そして自分の行動といった一連の反応には明確な一つの傾きがあることに気づかせてもらったことです。従来私は、自分は常に正しい判断をしており、それは他の誰よりも優れた判断であると無意識のうちに決めつけており、それに基づく自分の行動も正しいと思いこんでいました。そして、それは自分の才能や力量を反映した当然の結果であることを疑っていませんでした。

ところがある時、そうした自分の反応は自信過剰による積極性のあまり、事態を自分に都合よく歪曲して受け止め、独善的にものごとを進めてきたことにはっと気づかされたのです。

もう一つ与えられた気づきは、自分がこれまで享受してきた恵まれた環境、さらには多くの人から与えられた助力があったからこそ今の恵まれた自分があると、ふと意識させられる瞬間があったことです。それを一瞬のうちに、そしてはっきりと気がつく機会をいただいたわけです。

こうした二つの認識面における転換が突然できたことに驚くとともに、これまでの自分が長年行ってきた様々な対応に愕然とし、大きな後悔をせざるを得なかったのです。それ以降、自分のこうした傾きを常に心に留めることができているのは、人智を越えた大きな力のおかげである、と考えています。そして、私がものごとを感じ、受け止め、そして行動するに際しては、好き嫌いあるいは他人の目などの表面的な尺度を超えたより根源的な基準、それは菩提心と表現されることもあります（高橋 二〇〇八）、それを自分の中に呼び出し、それに基づいて判断し、行動することが大切とを感じるようになりました。

以上のような経験を言い換えていうならば、それは人間を超えた高いところからくる声なき声による呼びかけ（silent calling）に基づいて判断し、行動することの必要性を私にさとしてくれる瞬間だったのだ、と私には思われます。

人は、このように人智を越えた力の助けを得て初めて正しい判断ができることもある、と思います。したがって、それを求める心構えを忘れてはならず、まさに冒頭の聖書朗読にあったように、その場合にはじめて人智を越える間違いのない判断ができ、そして大きな助力を得ることができるのだと思います。言い換えれば、宇宙を貫く指導原理が沈黙のうちに私たちに呼びかけており、心を澄ましてそれを聞くことによって知恵と、心の平安、そして調和がもたらされる（高橋 二〇一〇）のだと思います。

最後に、ニーバーによる祈りの言葉を再度朗読することによって本日の奨励のことばを結びたいと思います。

神よ、私にお与えください

変えることができないものは、それを受け入れる平静な心を

変えることができるものは、変える勇気を

そしてこれら二つを見分ける知恵を

[追記] 上記メッセージの当日の音声録音は、著者のホームページ上に掲載してあります（下記のURLを参照）。そこでは、上記メッセージのほか、当日の司会者のことばやオルガンによる讃美歌演奏なども抜粋して録音しているので、チャペル全体の雰囲気とともにこのメッセージをお聞きいただくことができます。なお、メッセージの進行にあわせ、関連する写真も順次自動的に画面にできるようにセットしてあります。

<<http://www.okabem.com/message2/index.html>>